

白山開山一三〇〇年記念祭  
白山長滝法楽連歌 世吉 一卷

平成二十九年六月二十五日

賦唐何連歌

〈初折裏〉

松や千代白山しろやますそに繁るらむ 南天  
 青田豊かに御慮みごころの下 多門  
 ほととぎす三つの国原祝こほきて 敏明  
 いやよ澄みゆく古里の空 泉  
 東より月をうつつさぬ水もなし 一希  
 瀬々の波音やや寒のころ 稔  
 分け入ればもみぢ色ます柚すまの径みち 多美子  
 時もきたりて霧も晴れゆく 恵美

〈名残折裏〉

有心衆うしんしゆならねばなかなかむつかしく 稔  
 あるをないとは言へぬ答弁 春美  
 玉くしげ箱に入れるは煙にて 逸子  
 亀ほどもに年をへましと 一希  
 誓ちかひてし後の縁えんはいかならむ 敦子  
 ふた道かくるあだ人や誰 南天  
 冬ざれにくなどの神の笑み優し 多美子  
 構へる店に焼ける枳餅 泉  
 色変へぬ姉齒の松を尋ねきて 伸子  
 旅の衣は露にぬれつつ 敦子  
 小京都こきやう都と税ぜいの上に赤き月 好博  
 宗祇法師を馬に見上ぐる 逸子  
 亡なき跡あとのいつまで残る絵姿に 一希  
 心ふかしと風もつたへよ 南天

〈初折裏〉

仰ぎ見る城の白壁際きさやかに 了  
 遙か偲おもびぬ去りし町並み 千恵  
 幼き日君の姿を求めつつ 裕雄  
 望みを掛くる恋の蕾に 敏子  
 露地の雪足跡二つ消え残り 好博  
 悴かじみし手に互あひまの念珠 逸子  
 吐く息に思ひを熱く吹きこめて 明子  
 短か夜の月すまし顔なる 敦子  
 夕闇の螢飛びかふ川の淵 伸子  
 めぐる盃しばし休らふ 春美  
 小謡ひの声を肴いほに山の庵 南天  
 障子にうつす初春の風 千恵  
 ささほこる花の戸ぼそを待ちわびて 一希  
 早よ句を出せと歌ふうぐひす 裕雄

〈名残折裏〉

階きさの橘たちかをるこの夕 稔  
 青竹の樋ひを清水流るる 了  
 なにとなくたのもしげなる景色して 敦子  
 山の尾根には雲のただよひ 裕雄  
 朝日影岩隈さへもてらすらん 一希  
 草萌えいづる雪のむら消え 南天  
 なほ満つるくるすの花に現れよ 逸子  
 おもざし見ゆる産土うぶちの春 春美

池田南天(柏市) 五 渡邊千恵(郡上市) 二  
 若宮多門(郡上市) 一 鶴崎裕雄(大阪狭山市) 三  
 日置敏明(郡上市) 一 山内敏子(郡上市) 一  
 木島 泉(郡上市) 二 佐藤好博(美濃市) 二  
 竹島一希(熊本市) 五 西田逸子(松坂市) 四  
 関本 稔(箕面市) 三 村形明子(京都市) 一  
 渡邊多美子(郡上市) 二 大村敦子(京都市) 四  
 松原恵美(郡上市) 一 高橋伸子(国立市) 二  
 古田了(郡上市) 二 清水春美(郡上市) 三